子どもの生活（遊び）に現われたオリンピック

萬代彰子

オリンピック東京大会が終ってから、ずいぶんなるが、子どもたちの日常生活には、あちこちにオリンピックが生きている。オリンピックはかけ声だけに終らず、日本人の老若男女をとわず、幼い子どもたちの魂にも深く深く焼きつけられる印象を与えたのである。こんなに日本国中の人々、世界の人々の血をわきたたせたオリンピックは過去になかったことであろう。宇宙中継という夢のような話も実現して、東京の人と同時に同じ試合が観戦でき、手に汗をにぎって興奮することができたのである。開会式の各国選手の入場行進、それと対照的な閉会式の入場行進、その他かぞえきれない感激シーンは、テレビ画面を通してではあったが、よくぞこの機会にめぐり合わしていたことよと、東京での開催を心から喜んだことである。ここに東京オリンピックに影響されていると思える遊びのおもなもの、あれこれを拾ってみようと思う。

1　聖火の本土到着を発端として、聖火リレーがはじまった。

オリンピック遊びの始まりは、何としても聖火が本土に到着したニュース画面をみた時からである。はるかギリシャのアテネから空輸されてきた聖火、安全燈からトーチへ、そして聖火台にとつぎ、つぎに若人たちによってリレーされるようすをみると、ただちに子どもたちは、長い積木の棒をかかげては、そのまねをして走りだした。5才児が威勢よく走りまわっているのをみた4才児は、はじめうらやましそうにみていたが、年長児が部屋へ入ってしまうと、こんどは自分たちで考え出したトーチを持って「聖火リレー」と言って喜んでいた。くる日もくる日も聖火リレーはつづけられ、そして最後は運動会の競技として「聖火リレー」をとりあげることになった。

2　三宅選手と三宅先生

オリンピックと同時に本学の教育実習が始まった。ちょうど二週

間である。4才児に配当された実習生の中に三宅という学生がいた。それぞれの学級で紹介された時、あたかもはじめて金メダルを獲得した重量あげの三宅選手が日の丸の旗をどうどうと掲げた直後でもあったので「三宅先生」を紹介すると、「三宅せんしゅ、三宅せんしゅ」と大よろこび、たちまち名まえを覚えてしまうし、せんせいとせんしゅをかけて、さかんに「三宅せんしゅ、三宅せんしゅ」と声をあげてつきまとったことである。

次々と金メダルがとれるかと期待したが、そのあとしばらくは音さたなく淋しいことであった。

3　体力測定の結果にも、金メダル・銀メダル・銅メダル

五月と十月の二回にわたって子どもたちの体力測定があり、走力、投力、懸垂力などを測定すると、子どもたちは、誰ちゃんは金メダル、銀メダルは、銅メダルはと、評価することに夢中である。誰しも金メダルを目標にしてがんばっているのであるが、どうしても金メダルにならないことがある。いつの間にか表彰台がつくられ一番高い所に金メダル・二番目は銀メダル・そして三番目は銅メダルと誘導者にみちびかれて台の上に登った子どもは、それぞれにメダルをもらっている。あこがれの金メダルである。

4　体操の採点とブランコやつりわの遊び

ブランコを揺っていても、今までと違う。「もっと、もっと」と横から応援のかけ声がかかる。自分たちで決めたある目標の位置以上に高く揺ることができているかどうか、審判が並んでいる。しばらくして少し揺り方をおとしたと思うとこんどはパッととび降りて両手をひろげて見事な着地の姿勢をしてみせる。

「はい。9.7です」と。

オリンピックが終ってすでに一か月半以上になっても、子どもたちは、9.7とか、9.3とか、小数点をつけた採点をしている。今までには考えられなかったことである。

また「遠藤選手だ」といっては、つりわにさかさまにぶらさがろうとして、なかなかむずかしい演技をくふうしてみせる。ウルトラC、とかいうのもたくさん生れた。今までも自由につりわを楽しむことができたはずであるが、オリンピックの体操以来、一段と子どもの興味は、つりわ・鉄棒・うんていなど、器具をつかってウルトラCを試みようとする子どもが増加したのである。体操日本の面目にかけてがんばってくださった小野選手の活躍、その他遠藤選手の名は、子どもたちのあこがれの的になったようである。あの美しいフォームに引きつけられた子どもたちの夢をそのまますなおに伸ばしてやりたいものである。

5　われこそはマラソン王アベベ選手

今年こそはだしの王様ではなかったが、マラソンのアベベ選手、また日本の円谷選手などの人気はたいへんなものであった。まるで自分はマラソン選手アベベであるように、毎日マラソン遊びが続けら

れた。追いついてぬけばまたぬかれる。園庭から廊下、部屋から部屋へと休みもせずに走りつづける子どもたち、折り返し地点をこしらえて走りつづけるのであった。

6　スローモーション演技

子どもたちはよくテレビを視聴した。幼稚園でみる時間が少なかった時でも、家庭でよくみているのであろう。立派な競技や演技のフォームがスローモーションで再現されるのをとらえたのである。その影響はただちに子どもたちの動きに現われてきた。速度の変化をからだであらわす子ども、リズム遊びの中でも喜んでスローモーションをやってのけたのである。ふしぎなものである。すべては子どもが自分で発見し、自分から進んで表現しようとしたのである。私どもは、テレビの影響がかくも大きいことを再確認したことである。

7　国旗あてゲームと国歌

入場行進で各国選手が国旗を先頭にどうどうと入場した。また金メダル、銀メダル、銅メダルの表彰につきものの各国の旗と国歌奏楽、そうしたことで日の丸の旗が日本の国の旗であるということがよりたしかになったと同時にどこの国にも旗があること、参加国のみんなが異ったそれぞれの国の旗を持っていることが理解されたらしい。「国旗あてゲーム」ということを生みだした。ちょうど、参加国の国旗を印刷したカレンダーもあったし、また布製の旗を部屋に飾ったりしていたので、どこの国の旗かということを競っておぼえようとする子どもが増加した。子どもたちの中で二枚の旗をみせ合って「これはどこの国の旗ですか」と一枚ずつ国名をいいあてるのである。たまたま参加国全部の国旗を正しく言いあてる子どもがあったことが刺激になったこともあるが、教師の面目がつぶれはしないかと心配する程、むずかしい国の名まえも知っているのには感心した。

それに加えて、国歌のレコードを二、三枚用意したところ、子どもたちは好んでレコードをかけて国歌をきき覚えた。今まで君が代の曲をきくと、相撲の歌とか、運動会の歌（国旗掲揚に用いた）とかいった子どもも多かったが、オリンピックからはそんなことは言わなくなった。アメリカの国歌をかけると、「それは、ききあきた」という子があったが、水泳などアメリカ国歌をきく機会が多くておぼえてしまったらしい。たまに、ソ連の国歌をかけてほしいと希望するものなどでてきた。

○　○　○

オリンピックを終えて、子どもたちにはっきりやきつけられたのは、いろいろの国があって、いろいろの人（人種の違う）がいること、国には国の旗があって、それぞれの国の歌があること。

世界の人々にふれる機会であったことは、ほんとに得難い経験であったと思う。

（大阪学芸大学付属幼稚園）